

JANU

国立大学協会情報誌
Quarterly Report

vol. 12
February 2009

「特集」日本の文化と伝統を
支える国立大学——伝える——



◆OPINION

筑波大学名誉教授

白川英樹氏

◆連載企画

支部通信

◆今、学生は！

自ら翻訳した絵本を
タイに届け図書館へ

宇都宮大学

タイ語サークル

ナムチャイ



日本の文化と伝統を支える 国立大学

四

グローバル化がますます浸透する世界の中で、それぞれの国や民族にとって、文化と伝統のアイデンティティ構築は存立の根本的命題であり、教育、特に高等教育の果たす公共的役割がきわめて大きくなっています。そこで年間テーマとして「日本の文化と伝統を支える国立大学」を掲げ、毎号、「学ぶ」「創る」「伝える」「伝える」の4つの切り口で、未来につながる文化と伝統のために、保持と革新の両面から、研究・教育・地域貢献を行う国立大学の活動を紹介してきました。年間テーマの最後を飾る今号の重点テーマは「伝える」です。

伝える

郷土芸能、地域の文化・歴史資料、学術資料、行政資料など、古代から現代まで、日本の文化と歴史の中に埋め込まれたさまざまな資産は、収集・保存・公開・活用されることにより、未来へとたしかに伝えられていきます。

IT活用のデータベース化、実物展示と仮想展示の相乗効果、そしてeラーニングの活用など、先人の知恵に若い力や新しい技術を結びつけ、伝統を次代、そしてさらに次代へと「伝える」ために、大学の関わる領域がますます広がっています。



伝統芸能の継承に貢献

【茨城大学】

「西塩子の回り舞台」とは、江戸時代の道具を用いて組み上げられた農村歌舞伎舞台で行われる地芝居や浄瑠璃の公演です。全国最古の組み立て式舞台で挙行される郷土芸能として、茨城県の民俗文化財に指定されています。半世紀ほど途絶えていましたが、地元住民や自治体、研究者の努力で10年ほど前に復興され、その後は数年に一度、挙行されています。江戸時代以来の回り舞台を覆うドームは、間口・奥行とともに20メートルを超える巨大なものです。これを毎回、丸太を組み、

300本の青竹を使って創り上げるのです。その作業は、毎回、地元保存会の皆さんの芸術的な「技（わざ）」によって成し遂げられていますが、農繁期の工程は、決して楽なものではありません。

茨城大学人文学部では、郷土教育・歴史教育の一環として、また茨城大学地域連携推進本部が企画する学生地域参画プロジェクト事業の一つとして、学生がボランティアとしてこの作業に参加することを推奨し、計30人ほどの学生がこれに応じてくれました。今回は、国民文化祭の事業として11月8日・9日に舞台公演が行われました。人文学部では、

授業などの中で基礎的な知識を提供し、学生は、自分たち主体の組織を立ち上げて、組み立て作業に参加しました。途中、何度も雨にたたられましたが、学生は、部材の出し入れや作業補助、回り舞台を覆うドームの骨組みに使う竹の運搬など、地元保存会の皆さんと一緒に、のべ10日間ほど働きました。また公演当日は、裏方として舞台の設営や芝居の進行などのお手伝いをしました。

すぐれた伝統芸能について、机上で学ぶだけではなく、地域の人々がそれをいかに担ってきたのか、文化を継承するとはどういうことなのかを考える、貴重な体験を得る機会となっています。



写真1：組み立て作業
写真2：奈落で舞台を回す学生
写真3：回り舞台での公演
写真4：回り舞台での公演

バーチャルミュージアム・ データベース

学術資料をウェブ上で公開

―神戸大学バーチャルミュージアム―

【神戸大学】

神戸大学では、所蔵する貴重な歴史的学術資料を一般に広く公開するため、ホームページ上にバーチャルミュージアム（仮想展示室）を完成させました。現在は、「旧制姫路高等学校物理実験機器コレクション」と「神戸大学海事博物館バーチャルミュージアム」を公開中です。専門家による詳細な解説文と資料のデジタル化による静止画、動画、映像、音声などを組み合わせたマルチメディア形態のコンテンツを通して、今は無き旧制高校での高度な物理学教育の様子を追体験したり、江戸時代の北前船や海図をさまざまな角度から探索して楽しむことができます。



写真1：海事博物館バーチャルミュージアム「北前船」

写真2：旧制姫路高等学校物理実験機器コレクション「エルステッド氏試験器」の解説と動画

写真3：実物と併用した中学・高校生向けeラーニング教材としても利用

英語バージョンも一部併設し、国際的な要望にも対応しています。また、中学・高校生向けeラーニング教材としての活用や、実物による展示との相乗効果も期待されています。わが国の文化と伝統を支える教育・研究の成果を地域社会に生かし次世代へと伝えるべく、今後さらなる内容の充実に取り組めます。

紅花文化を後世に伝える

―紅花の歴史文化館―

【山形大学】

紅花は山形県の県花であり、山形の歴史文化を語る際にかかせない存在の特産品です。

初夏の早朝に摘み取られた紅花はせんべい状の紅花餅（はなもち）に加工され、最上川を川舟で酒田へくだり北前船に積み替えられて京都・大阪に運ばれました。紅花一俵は米一俵の値段より高価でしたが、



写真1：紅花の歴史文化館トップページ

写真2：紅花摘みの情景

写真3：白でつき平たくした紅花の乾燥作業



写真1：寄贈された市町村郷土史

写真2：地域資料・情報センター書庫内

花卉に含まれる色素は化学染料のない当時、口紅、友禅染、薬として珍重され上方文化の交流を支え、紅花を運んだ船は返り荷として石灯籠、雛人形など多くの上方文化を最上にもたらしました。米、紅花、青芋など運んだ最上川舟運は江戸時代に最も発展し、多くの舟運文化が山形に残されています。

現在も紅花は栽培され観光客の目を惹かせています。その他、着物などの紅花染や生け花に用いられ、ドライフラワーとしても飾られ親しまれています。

これら紅花に関係する情報を集め電子化し、伝えているのが山形大学附属図書館の「紅花の歴史文化館」です。このウェブサイトでは、研究書、古文書、画像、標本などを見ることができ、研究や学習への利用、また観光や産業などの情報としても活用することができます。

自治体保有の行政情報を収集・公開

―地域資料・情報センター―

【岐阜大学】

岐阜大学の地域貢献事業の一つとして、平成14年に設置した地域資料・情報センターは、岐阜県内の市町村から寄贈された郷土史や岐阜県内関係の文献、約3,000点を収集してデータベース化し、ウェブ

上で公開しています。

テーマ別では、河川・ダム・原発を中心とした環境問題や、岐阜県内の労働問題関係の資料も整理されつつあります。また、岐阜県では、平成15年に99あった市町村が合併により現在、42市町村となりましたが、収集した資料には旧自治体の総合計画、部門別計画、調査資料などが含まれています。

これらの資料は、文化・風土の教育・研究に必要なデータとすることが予想され、学内の研究活動のみならず、自治体関係者や住民などが広く利用できる機能を持っています。

また、平成19年には、長良川治水や渡船場普請関係の史料や、水害をめぐる論争の史料などが多く残された「美濃国方県郡河渡村村木家文書目録」(河渡村は長良川右岸に位置し水害が頻発した地域で、中山道の宿場でもあり「河渡の渡し」がありました。)を刊行しました。この村木家文書目録をデータベース化し、ウェブ上で公開しています。

現在は、長良川河口堰運動に関わる資料を整理中です。これからも歴史的風土で培われた文化財の保存・伝承・活用を通して、地域の活性化に貢献していきます。

資料・蔵書

山梨大学近代文学文庫常設展

【山梨大学】

山梨大学には、近代日本文学の専門文庫の中でも屈指の歴史を誇り、その分野では全国的に名の知れた「山梨大学近代文学文庫」があります。

本文庫は、国文学研究の重要な明治・大正・昭和期

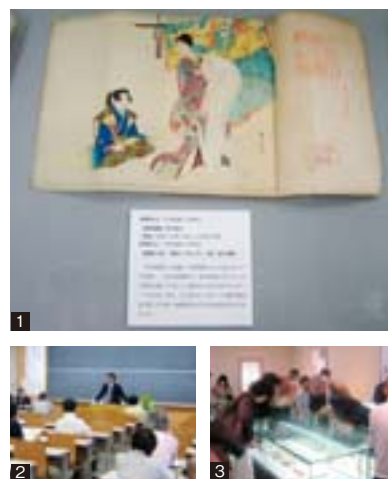


写真1: 泉鏡花(照葉狂言・てりはきょうげん)
写真2: 「尾崎紅葉門下の四天王」講演会
(中丸宣明教授/山梨大学教育人間科学部)
写真3: 展示場で鑑賞する講演会参加者

の日本文学を彩るさまざまな作家の初版本や文芸雑誌を収蔵しており、開学早々の昭和24年に設置されてから毎年拡充しつづけ、今日では蔵書数7,000冊を超えています。例えば、与謝野晶子著作関係、尾崎紅葉著作初版本、雑誌では、「明星」、「スバル」などがほぼ全て揃っています。それらの本の中には、斬新で個性的な美しい口絵や挿絵が描かれ美術品として鑑賞できるものもあり、文学史的な興味に止まらず、美術史的な興味をも十分に喚起してくれます。

これらの活躍した文人群像を伝えるため、毎年、講演会や附属図書館常設展示室(2005年開設)で「明星」とそこに集った詩人たち、「尾崎紅葉と硯友社の文学」と題して展示会を開催するなど地域社会に広く公開しており、最近では、学外からの研究者や近代文学関係の卒業論文を書く学生の利用も多くなっています。

戦前の輸出入商品を実物で見る

— 山梨大学経済学部商品資料館 —

【山口大学】

古来、人や物の交流のなかでさまざまな商品が生

まれ、そして先人たちの努力によって育まれ今日に伝えられています。

明治38年、山口大学経済学部の前身である山口高等商業学校が創設されました。創設と同時に設置された商品学の授業の研究資料として各種商品の収集が始められ、明治41年に商品陳列室が設置されました。その後も一貫して商品資料の収集が続けられ、平成7年には商品陳列室を発展的に継承する形で、全国的にも珍しい商品資料館が建設されました。

現在、商品資料館には、長年にわたって収集された主要な産業の商品や輸出入商品など8,000点を超える貴重な資料が収蔵されています。特に戦前の主要な輸出入品の収集は、品種、数量ともに他に類を見ないものです。

商品資料館は隣接する東亜経済研究所とともに、産業経済の実証的教育研究の伝統継承及びその発展に資することはもとより、これを広く社会に公開し、地域の人々の生涯学習教育にも貢献していきます。



写真1: 商品資料館(左)及び東亜経済研究所(右)
写真2: 商品資料館見学風景

学ぶ

「留学生30万人計画」が本格化しはじめた現在、海外からの研究者や学生を受け入れる地域密着型のプログラムや、小学校からの英語学習でコミュニケーション能力を養うための支援プログラムなど、大学が提供する「学び」のスタイルもさらに多様化しつつあります。

海外からの研究者、
学生や地元住民と育む異文化交流

【総合研究大学院大学】

日本学術振興会JSPSのサマープログラムで来日した欧米諸国からの研究者約100人は、全国各地の大学、研究機関で2カ月間あまりの研究活動を行います。毎年6月の来日直後の1週間は葉山に滞



写真上：書道を教わる研究者
写真下：お茶のたて方を教わる研究者

在し、日本で研究活動を行うためのオリエンテーションを受けます。プログラムの中に、2泊3日のホームステイや同大学学生を交えた茶道・書道・折り紙などの日本文化体験があり、葉山・横須賀の周辺地域住民からの多大な協力を得て行われ、海外研究者の日本文化に対する理解を深めています。

小学校英語活動支援事業

【宮城教育大学】

宮城教育大学に設置されている附属国際理解教育研究センターの事業として、小学校における英語活動の支援事業を実施しています。これは、総合的な学習の時間を活用した英語活動のプログラム開発や、小学校における指導体制や指導技術に関する研究を目的としています。また、教員の研修事業の他、留学生の小学校への派遣事業も行っており、児童と日本の伝統的遊びを通じた国際交流を進めています。児童にとっては、多文化を体験することで見える日本文化とその独自性、さらには多文化理解に対する感性を養うプログラムであると考えています。



写真上：交流後のお別れの様子
写真下：あやとり遊びを通じた交流

創る

人材は人財とも言われます。とすれば、究極の「創る」は、人材育成に他なりません。課題解決能力、コミュニケーション能力に加えて、行動力やリーダーシップを備え、足元の地域の活性化に貢献するとともに、さらには世界にも通用する人材を育てていくための大学の取り組みが今こそ必要とされています。

海外インターンシップで世界に通用する
技術者・研究者を育てる

【北海道大学】

工学系の大学院修了者には、高度な専門知識や研究能力に加えて、多様な技術課題に対応する実践力やリーダーシップ、国際コミュニケーション能力や行動力が求められています。北海道大学工学系教育研



チェコスロバキアの大学でのインターンシップ



写真上：もろみに含まれる糖濃度分析
写真下：焼酎の官能評価

鹿児島県の焼酎や黒酢など食文化の創造と食産業の発展に寄与し、地域の再生に貢献できる人材を県・食品業界と連携して養成する教育プログラムです。平成18年度の文部科学省科学技術振興調整費「地域再生人材創出拠点の形成」事業として実施しています。「食の安全管理」「経営管理」「健康・環境・文化」の3コースにおいて、製造技術や経営力を高めて世界に通用するブランドを確立し、地域活性化を図ります。

【鹿児島大学】 かごしまルネッサンスアカデミー

究センターでは、産官学連携による「海外長期インターンシップ」を実施しており、毎年約30人を約2カ月間にわたり世界各国へ派遣することにより、技術実践力、国際性、行動力に優れた、世界に通用する人材の育成を目指しています。参加者は、語学力の向上はもちろん、国際交流への積極性や研究意欲の向上など、帰国後の成長が顕著に表れています。

究める

農業廃棄物から新たなエネルギーを創出し、地産地消の循環型社会を形成したり、地域特産の桑から健康をサポートする高機能商品を開発し、地域の新産業創出に貢献するなど、地域の資産を新たな観点から「究める」ことにより、QOLの高い生活を創造するために大学の果たす役割が大いに期待されます。



農業廃棄物から新たな資源を生産

【北見工業大学】

北見工業大学の化学システム工学科吉田孝教授の研究室では、北海道の農業から発生するビートの搾りかす、トウモロコシの茎などの廃棄物を利用して、亜臨海水を用いバイオエタノールを生産する研



写真上：液体培養の準備
写真下：北海道のビート畑とビート残渣（ざんざ）

究をしています。この研究が実を結んだ際には、地域で作った物を地域で消費する、地域循環型社会の実現に大いに役立つと考えられます。

桑食文化で人も地域もみんな生き生き

【岩手大学】

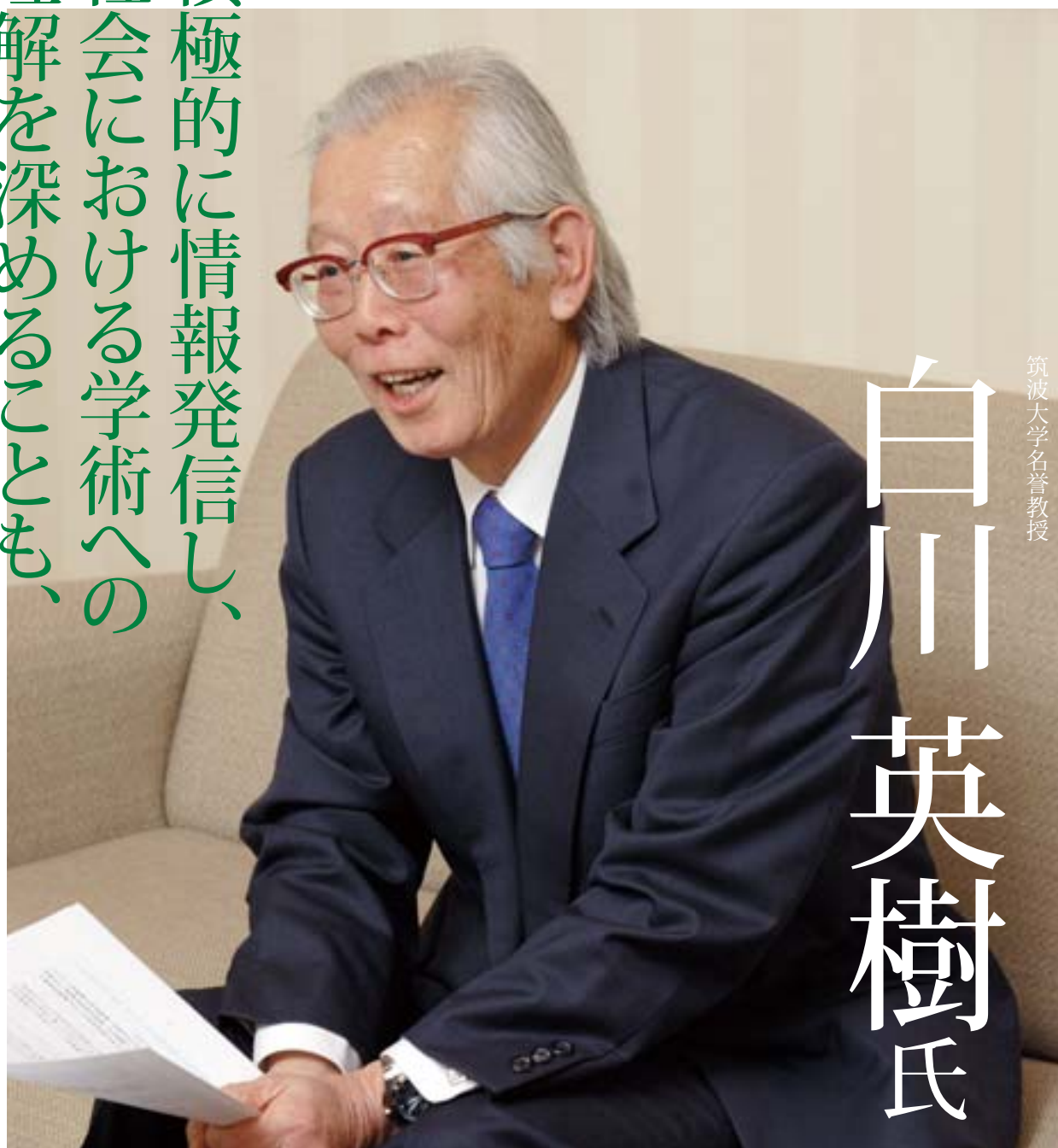
数年来、糖吸収阻害効果により糖尿病予防として注目を浴びている「桑」に、新たに「超免疫賦活化機能（人の免疫を高める機能）」と「抗加齢機能（アンチエイジング）」があることを、農学部鈴木幸一教授を中心とした研究グループが発見しました。岩手県内の桑生産の約6割を占める県南地域の桑を用い、桑生産農家や地元企業と連携して、新機能を付加したゼリー、ソーセージ、発泡酒などの新商品の開発に着手し、平成20年度の商品化を目指しています。20世紀まではカイコの食餌作物だった桑が、21世紀は人の健康を支え、QOL向上の切り札となるだけでなく、地元地域の新産業・新事業の創出につながれば、人も地域もみんな生き生き！



図（上）：地元企業が試作した各種食品
図（下）：「桑食文化」の提案

筑波大学名誉教授

白川英樹氏



積極的に情報発信し、
社会における学術への
理解を深めることも、
大学の責務です。

「独創性」を育ててきたか

明治以降の日本の教育を振り返ると、初等中等高等教育を通じ、座学が中心でした。概ね教師による一方的な授業で、しかも全員一律でした。これは特に義務教育に関しては、平均的な水準の向上に大きく寄与したと思います。しかしその一方で、突出した人間をどう育てるか、という視点はほとんどなかったのではないのでしょうか。学業でのトップということではなく、自分の考えにおいて独創性のある児童・生徒をあまり育ててこなかった。

一学級の人数も関係しています。独創性を育てるという面では、40人というのは難しいのではないのでしょうか。最近では改善もされているようですが、一人ひとりに適切な指導を施すという点では、多人数教育の弊害もあるように思います。

また、自分の意見を述べる訓練が足りないような気がします。先生の言うことは正しい、教科書に載っていることは間違いないということで、自分自身で評価をする、コメントを加える姿勢が育っていないのではないのでしょうか。これは幼い頃からの家庭教育も含め、長い目で養わなければいけないことだと思います。

大人の立場を明確に

戦後、日本は民主主義の世の中になつて、いろいろ変わりました。中でも大きく変わったのが親と先生のあり方です。それまでは親も先生も怖い、尊敬される存在だったのが、子どもたちと友だちづきあひするのを善しとするような「良い親」、「良い教師」に変わつてしまいました。

個人を尊重し、自由と平等を重んじるのは確かに大切ですが、大人と子どもが対等であるというのはあり得ない話です。親には親の立場と責任がありますし、教師も同様です。教える者の立場、育てる者の立場がないがしろにされてはいけませんし、子どもたちにも良くない影響を与えかねません。一人の人間として児童、生徒、学生に接しつつ、大人には学ぶべきところが多くさんあるのだという姿をしつかりと示さなければならぬと思います。その一方で、良い点を見出して評価し、褒めてあげることも大事ですね。

自然に親しむことの大切さ

近年、特に大都会では人工的なものに囲まれ、教育にもバーチャルなものがたくさん導入されています。確かにコンピュータは優れた能力を持っているけれども、プログラムするのは人間ですし、インプットするのも人間です

から、そういう人の知識を超えることはありません。そういった限界があるのに、コンピュータでやるとすごいとなるのは、どうも納得がいきません。

それに対して自然というのは、見ていけば見ていくほど奥が深く、留まるところを知りません。奥行きはいくらでもあり、疑問も次々に湧いてくるわけです。そうなる自分ですべてみなければならぬ。知らないことは教わればよいというのではなく、自分で見て、考えて、やってみるということがとても大切だと思います。

童の心を持つことも重要です。大人になるにしたがつて「何かおかしいぞ」という疑問を持たなくなりますが、この童心こそ知的好奇心そのものでしょうし、それがなくなつたら科学の発展は望めません。

「セレンディピティ」の持つ意味

「セレンディピティ」とは、「探し求めていたわけではないが、偶然がきっかけで素晴らしい発見をする能力」のことですが、これを発揮するためには、その偶然に出会った人が幅広い知識、旺盛な好奇心、認知力や洞察力などに富んでいることが不可欠です。発見や発明は自然科学の分野だけに留まりません。人文科学にも社会科学にも芸術の世界にも、一般の仕事にも「セレンディピティ」はあるので、とても大きな意味

を持つていると思います。

大切なのは、人としての「知の土台」がしっかりとできていること。小さい頃から自然に親しんで知的好奇心を育み、確かな幼児教育・義務教育を受け、大人になるにしたがつて基礎教養も充分に身につけていかなければ、仕事や研究の肝心なところで直感も働きませんし、創造力、独創性も生まれません。

教養教育の復権を

新しい価値創造のためには専門性を高めることが重要ですが、同時にそれは、どうしても深く狭くなつて自由な発想ができなくなつてくるということがあります。これを打ち破るのは、その人がそれまでに蓄えた基礎的な知識と教養だろうと思います。

大学の基本的な役割は、社会にとつて有能な人材を育てることですから、研究も勿論大事ですが、学部での4年間は教養教育を重視するべきであるとも今でも考えています。しかし実際にはそれと全く逆行する国立大学の教養部の改組が全国で行われており、専門教育の前倒し傾向が顕著です。この問題は教師の評価のあり方にもつながっています。論文や研究成果での評価に傾きすぎず、しっかりと教育をする先生がもつと高い評価を得てよいと思います。

大学への入り方は多様であつていい

誰でも大学に入れるようになった昨今、学生の基礎学力の低さや目的意識の希薄さが問題になっています。これを解決するためには、高校までの教育で、勿論教科は基本ですが、自分分はどんなふうに生きていくのか、何を生業にしてどんな将来設計をするのか、ということをもつと考えさせないといけないと思います。

横並び志向も問題で、皆と同じでないと安心できないということでは、自立した大人にはなれません。18歳で大学に入ることにこだわるのではなく、高校を卒業したら一度社会に出てみることに大きな意味があります。そこで仕事をし、経験を積んで、目的が定まつてから大学に入つて勉強するということができれば、大学はもつと活性化します。大学に入るのに間があくのは、履歴に傷がつくのではなく、むしろ花丸がつくくらいになつて欲しいですね。

世の中へのプレゼンテーションを強化せよ

私は総合科学技術会議の発足から2年間、議員を務めたのですが、そこでつくづく感じたのは、行政の縦割りです。各省庁に割り当てられている予算は一旦解消して、国として全体を統合し

て考えなければならないと思うのですが、これが難しい。大学への寄付にしても、アメリカのように細かなところまで税制上の優遇措置を講じるべきだと思うのですが、税制改革も簡単ではありませんので、もっと社会で議論して取り上げていくことが必要だと思います。

国からであっても民間からであっても、大学が必要としているお金を出してもらうためには、社会全体が教育や基礎研究の大切さをもっと深く認識する必要があります。そのためには、教育ジャーナリズム、あるいは科学ジャーナリズムをもっと振興させることが必要です。論文の寄稿や学会での発表はやってきたわけですが、これからはそれらと同じように、大学でやっていることの面白さ、大切さを、社会に対して分かりやすく上手に伝えていかなければなりません。専門外の方に説明するのは、非常に勉強にもなります。

先生方には、自分の研究や教育、置かれている立場などについて、あらゆる機会を捉えて発言して頂きたい。世の中に対する発言の量も頻度も増やして欲しい。また、「サイエンスカフェ」や「ひらめきときめきサイエンス」のようなプログラムで、子どもたちはもとより、一般の方々の興味関心を喚起したり、マスメディアと連携してサイエンス・コミュニケーターの育成を図ったりすることも重要です。

本当の意味で、開かれた大学へ

中小企業の方から「大学はなんて敷居が高いんだ」と言われたことがあります。大学の先生にこういう問題を相談したいのだが、誰に相談したらいいのか分からないと言うのです。大学の先生方が今まで社会にあまり顔を向けてこなかったからかも知れません。中小企業も高い技術を持っていますから、研究室にとっても参考になると思うのですが。

国際交流にしても、頭脳流出ということが言われていますが、むしろ頭脳流入をもっと考えたほうがよいのではと私は思います。そのためには、研究環境、そして住環境を改善することが必要です。そのきっかけとしては、お金もかかりますが、国際会議をできるだけ国内で開催するのがよいでしょう。海外の研究者や学生に来てもらう。こちらからも海外の国際会議に積極的に参加する。そうしたことを通じて、人的ネットワークを充実させつつ、本当の意味での開かれた大学を組織として力を合わせて目指していくことが大切だと思います。

若者は「本物」に触れよ

若い人には、本物に親しむ努力をして欲しいと思います。本物というのは、

普遍的なもの、どの時代でも大切にしたいと思うもの。これは科学に限らず、文学でも絵画でも音楽でも同じで、本物に親しむことによって、それを見る目が養われます。本物と偽物、紛い物を見分ける感受性や知識、知恵も身につきます。このことは、クリエイティブを発揮する上で実に重要なわけです。自然も、本物の宝庫ですね。

また、専門以外の本を積極的に読んで頂きたいと思います。手当たり次第でもよいし、評論でもよい。読んでいればそれがきっかけとなって、こんな本も

あるとかどんどんつながっていく。そうして自分の知の世界を大きく広げ、オリジナリティを生み出す土台をしっかりと築いて欲しいと願っています。



白川 英樹(しらかわ ひでき)

1961年 東京工業大学理工学部卒業
1966年 東京工業大学大学院理工学研究科修了 工博
1966年 東京工業大学資源化学研究所助手
1976年 ペンシルバニア大学博士研究員
1979年 筑波大学物質工学系助教授
1982年 筑波大学物質工学系教授
2000年 筑波大学名誉教授
2000年 ノーベル化学賞、文化勲章受賞
2001年 内閣府総合科学技術会議議員(～2003年)

支部通信

全国の国立大学の新しい風をお届けします。



北海道教育大学

「エデュケーション・カフェ」を開催



小6家庭科「不用品の活用とごみのしまつ」の授業を行う高校生

北海道教育大学では、平成20年12月6日に「エデュケーション・カフェ」を開催しました。「エデュケーション・カフェ」とは、「サイエンス・カ

フェ」になぞらえ、「教育」というキーワードについて、さまざまな視点・方向性から気軽に語り合い、議論を交わし、理解を深めることを目的とした催しです。

今回はその1回目として、同大釧路校において、市内高校生を対象に、実際の教師の職業を体験してもらい、その体験を通じて、教師という職業について身近に感じてもらうことをテーマに行い、当日は32人の高校生に参加していただきました。

小学校1年生～6年生の6つの班の、それ

ぞれ希望する班に分かれ、小学校の授業づくりを大学生や大学教員と一緒に考えて、最後は実際に黒板の前で授業を行いました。

授業後には、感想を述べ合い、「自分が小学生のときは、先生がこんな考えで授業しているとは、考えたことがなかった」といった感想が述べられていました。

同大学が地域の方々と共に「教育」について考え、理解を深めていく「エデュケーション・カフェ」を、今後も北海道の各地で行っていく予定です。

東北大学

東北大学百周年記念会館がオープン



写真上：百周年記念会館
写真下：萩ホール内観

東北大学では、創立100周年記念事業の一環として、創立50周年を記念して建設され

た東北大学記念講堂及び松下会館を、世界水準の音響と学術会議機能を備えたホール「東北大学百周年記念会館（川内萩ホール）」に改修、平成20年10月に開館いたしました。

建築家・阿部仁史氏（同大学元教授、現UCLA建築都市デザイン学科長）が設計監修し、外観のデザインは可能な限り保存したうえで、独創的で落ち着いたある内装を実現させました。

また、ホールの音響は、同大学電気通信研究所の鈴木陽一教授の研究室によるハイブ

リッド可聴化システムの技術によって、竣工前に、改修後の満席時における音響特性を予測、高品位となるよう設計されました。

12月10日には、実際にホールを満席にし、世界でも類のない規模による公開音響測定も実施されました。音響測定後には、一流の音楽家によるスペシャルコンサートが開催され、実験に協力いただいた市民の皆様は、ホールの高品位の音響を体感、お楽しみいただきました。

大晦日にはジルベスターコンサートも開催し、美しい名曲とともに新年を迎えました。

一橋大学

金融危機に関する公開討論会開催



金融危機に関する公開討論会(兼松講堂)

一橋大学は、平成20年11月19日に「金融危機に関する公開討論会」を開催しました。

この企画はグローバルCOEプログラム「社会科学の高度実証・統計分析拠点構築」が主体となり、昨年来、世界経済に大きな波乱を巻き起こしている金融危機に関して、同大学の金融専門家6人が集まり、この危機の本質、マクロ経済学への含意、政策当局の対応、金融工学の効用と限界、アジア経済との関係、といった複合的な観点から解説を行ったものです。

平日の午後であるにもかかわらず462人

もの参加者が集まり、熱のこもった議論が展開され、今後のアジア経済における日本のあり方や世界経済秩序への日本の貢献など、将来に向けての課題も確認しました。

同大学の知的資産を生かして、年金、高齢化、安全保障などの分野でも、社会情勢と連動したタイムリーな企画を開催し、積極的に研究成果を社会に還元していきます。

また公開討論会の映像を、同大学ホームページで公開しています。

上越教育大学

学生の自主的創造的な活動「学びのひろば」



子どもたちを大学キャンパスに招き、青空の下で活動

上越教育大学では、平成10年から、学生の自主的な活動「学びのひろば」を支援しています。本活動の目的は、学生自身が自己理解を深め、子ども理解を深めること、すなわち学生が体験を通じて人間理解について学ぶことです。

平成20年度においては、7つのクラブが運営され、学部学生約200人、地域の子ども約300人が、年間9日(2泊3日の宿泊を含む)の活動に参加しました。

この活動の特徴は、学生の自主的創造的な

活動であることと、内省的な評価を重視していることです。本活動では、学生自らが、企画立案から当日の運営、保護者への連絡、危機管理体制の構築まで、すべてに責任をもち、体験を通じて学びます。また、活動の前後にはクラブごとに事前の打ち合わせや反省会を重ねたり、シンポジウムを開催したりして、クラブごとの成果を共有し自らの就職適性を多角的に吟味しています。今後も、大学としては、この活動の趣旨をふまえ、学生たちが価値ある学びを生成できるよう支援する予定です。

北陸先端科学技術大学院大学

地域の伝統工芸産業のリーダーを育成



グループ討議

北陸先端科学技術大学院大学では、平成19年度より文部科学省・科学技術振興調整費による「石川伝統工芸イノベーション養成ユニット」事業を進めています。本事業は石川県を始め伝統工芸の産地を擁する自治体や産地組合と協力し、伝統工芸産業の次代を担うイノベータ(革新者)の育成を目指しています。

本事業で提供する教育プログラムは次の3つのコースから構成されています。①伝統工芸MOETコース…金沢に各界のトップランナーを招いての講義や事業プラン、業務改革プラン

の策定、②産地MOET実践塾…伝統工芸産業の従事者を対象とした商品企画立案の演習、③商品開発実践プロジェクト…産地MOET実践塾で立案した商品企画をさらにブラッシュアップして商品開発を行い、展示会で発表しています。

これまで受講生の企画能力・商品開発能力の向上のほか、受講生を中心とした異業種間ネットワークの形成、9月には国際見本市のコンテストで受講生の開発した商品が準グランプリを受賞するなどの成果をあげています。



兵庫教育大学

子ども・ファミリーイベントを開催



写真上：親子でそば打ち
写真下：わくわく理科

兵庫教育大学は、平成20年10月13日、澄み切った秋晴れのなか、創立30周年記念行事の一环として子ども・ファミリーイベントを開催しました。

石ころの中にある美しい鉱物や小さな生き物を観察したり、七宝焼きでオリジナルバッチやマグネットを作る「わくわく理科」、教材ロボットの制御などを自由に体験できる「体験！おもしろ技術教室」、親子でそば打ちを体験し日本の伝統・文化や食について学ぶ「親子でそば打ち」、伝統楽器「箏」の演奏の楽しさを体験

する「箏を弾いてみよう」など多くの体験型イベントを開催し、地元の小学生や保護者など400人を超える参加があり、どの教室からも子どもたちの楽しそうな声が響きました。

イベントの参加や大学施設の見学などを通じて、参加者たちからは「兵庫教育大学を身近に感じることができた」という声が多く寄せられました。

島根大学

学生の自主的活動の評価と教育効果の向上の取り組み



写真右上：ビビットカード
写真中央：落ち葉清掃

島根大学では、文部科学省の学生支援GPの採択を受けて、大学の正課以外のサークル活動・ボランティア活動・各種セミナーなどの活動への積極的な参加を学生に促し、自立やコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とした取り組みを行っています。この取り組みでは、学生にポイントカード（ビビットカード）を配付し、正課以外の諸活動に応じてポイントを付与します。このポイントは教科書などを購入する時に金額換算するという仕組みとなっています。このシステムにより、大学が積

極的に正課外活動を評価（可視化）するとともに参加を誘導することにより、学習意欲の向上を図っています。さらに、学生の諸活動の履歴は、履修状況、就職活動、面談記録などとともに二元的に参照できる既設の「学生電子カルテシステム」に登録します。それを参照し、指導教員などがきめ細かい指導を行うとともに正課と正課外教育の相乗効果を検証することによって教育改善に資するものです。

九州大学

大学・地域住民・地域自治体が一体でお祭り開催



多くの来場者で賑う伊都キャンパス

九州大学の教職員・学生と、現在移転を進めている伊都キャンパスの周辺住民、地域自

治体が一体となつて互いに交流・連携し、ともに発展するための関係づくりの一つとして、大学と地域の魅力を発信するイベント伊都祭2008「きちゃつてんしやい！伊都キャンパス！地球を守れ！伊都環境サミット」を、同キャンパスで平成20年11月1日に開催しました。

伊都祭は一昨年初めて開催され、今年度は「環境」をテーマに、環境に関連したイベントや展示会をはじめ、日頃学生が行っている研究内容を分かりやすく説明するサイエンスワー

ルドも同時に行われ、6,000人を超える来場者が同大学の最先端の研究に触れていました。また、会場には地域の特産品・食品・工芸品を扱った30以上の露店も並び、特設ステージでは地域団体・学生による伝統芸能やダンスなども披露され、子どもを対象としたイベントも多く開催されたこともあり、家族で一緒に科学実験などを楽しむ姿が見受けられました。

今年4月には、六本松キャンパスが伊都キャンパスに移転することから、伊都祭のさらなる盛り上がりが期待されます。

今、学生は！

自ら翻訳した絵本をタイに届け図書館へ

宇都宮大学

タイ語サークル

ナムチャイ

部長 木村 美樹子さん
宇都宮大学国際学部2年

副部長 佐々木 まりやさん
宇都宮大学国際学部2年

土屋 瑛美さん
宇都宮大学国際学部3年

山口 野花さん
宇都宮大学国際学部1年

小坂 公子さん
宇都宮大学国際学部1年

依田 萌さん
宇都宮大学国際学部1年

ASEANの中心国としてめざましい発展を遂げ続けているタイ。経済発展とともに、就学率も上がり教育水準も高くなりつつありますが、北部の山岳地帯や東北部などでは、書籍や文房具などが行き届いていない地域も少なくありません。宇都宮大学国際学部の学生を中心としたナムチャイは、そうした地域のひとつである、タイ・シーサケット県の小学校に、自ら翻訳した絵本を届ける活動を10年以上続けています。

翻訳を手書きして貼り付け 手作りで絵本を作り上げる

——ナムチャイの活動のきっかけは

木村 サークル結成は3年前と最近のことなのですが、タイへ絵本を送るという活動が始まったのは13年前のことです。語学担当のスジンダ先生（泉田スジンダ・国際学部非常勤講師）が大学の授業で日本の絵本を翻訳してタイの小学校へ送る、という活動を考えたそうです。メンバーは1学年5人前後で全体で約20人、国際学部の

学生がほとんどですが、農学部や教育学部でタイ語を選択している学生も参加しています。

——活動に参加したきっかけは

木村 高校の先生からタイはいいところだと聞き、タイ語が選択できる学校というところで宇都宮大学を選びました。そして、入学後にスジンダ先生からナムチャイを紹介されることになりました。ほかのメンバーも、タイ語の授業で活動を知って参加、という形が多いと思います。



写真左から、佐々木さん、土屋さん、木村さん、依田さん

依田 私は元々本が大好きなので、タイ語の授業中にナムチャイの活動紹介を聞き、絵本を送る活動なんて素敵だな、と考えてサークルに入ることにしました。

——現在の主な活動は

木村 サークルとしての活動は、タイ語に翻訳した絵本を届けるというもので、毎年40〜50冊の翻訳した絵本を小学校の図書館へ贈っています。翻訳は「タイ語文章表現」という授業で行っているのですが、メンバーはこの授業を選択していますので、実際には自分たちで翻訳した絵本を届けるという形になっています。

依田 私達1年生はタイ語は習い始めたばかりなので翻訳はできないのですが、翻訳した文章を手書きにして絵本に貼り付ける作業などを行っています。

佐々木 ナムチャイとしてとくにタイ語の勉強はしないのですが、日常のなかでタイ語に触れる機会が多くなることが上達につながっていると思います。また、絵本の翻訳では日本語にあってタイ語にない表現というものに出会うことも多く、難



山口 入学後、漢字やアルファベット以外を使う言語を学びたいということで、タイ語を選びました。サークルについては、授業で先輩方がサークル紹介をされているのを聞き参加することになりました。小坂 私の場合、アジアのいろいろな言語に興味があったのですが、そのなかでもタイ語で使う文字に惹かれてぜひ勉強してみたいと考えていました。そのとき、大学案内に掲載されていたナムチャイの活動内容を見て、ぜひ参加したいと宇都宮大学を選びました。

しく大変なのですがお互いの文化の違いを感じられ楽しいところです。

木村 活動を通じてタイの文化に興味を持ち留学する人もいて、現在も2人がカセサート大学などに留学しています。

本に残る子どもたちの跡を見て活動が役立っていることを実感

——翻訳した絵本はどのようにして

小学校へ届けていますか

木村 年に一度、春休みの間に私たちが直接小学校を訪ね、絵本を届けています。小学校訪問は活動のメインでもあるので、メンバーが一番楽しみにしていることです。訪ねるのは、タイ東北部・シーサケット県のパイヤオタース村にある小学校で、スジンダ先生や「タイ子ども財団」に検討をお願いして選んでももらいました。

土屋 最初に活動をはじめた先輩方は、小学校に図書館を作るところからボランティアで参加していたと聞いています。小学校とのつきあいは10年以上と長く、私

たちが訪ねると「絵本の人たちが来た」とすぐわかるみたいです。

木村 昨年小学校を訪れた際、本をもらった子どもたちが喜ぶ顔をみるだけでもうれしかったのですが、長年の活動で贈ってきた本にすっかり子どもたちの手の跡が残っているのを見つけたときには、子どもたちの心に届いているんだ、本当にこの活動を続けていてよかったと思いました。

——今後の活動については

木村 この春休みにも再び小学校を訪ねる予定で、メンバーのほぼ全員がタイへ向かいます。私は今回で2回目となりますが、昨年は自分自身で作った本を贈っているので、果たして本がどれぐらい読まれているのか、とても楽しみです。

佐々木 ナムチャイの活動を通じて日本におけるタイ人の労働者問題など、いろいろな社会問題があることも知りました。サークル活動とは別に、こうした問題について日本の多くの人たちに知ってもらえる活動などもできればと考えています。

※ タイ語サークル ナムチャイ

平成7年にタイ語の受講生有志により開始された、タイ語へ翻訳した日本の絵本をタイ東北部・シーサケット県の小学校へ届ける活動を継続的に行うため、平成17年に結成。現在までに贈呈した絵本は500冊を超え、日本-タイ間の文化交流のなかで大きな役割を果たし続けている。

編集後記

先人から脈々と受け継がれてきた文化資産を、次世代へ「伝える」ことは、大学の重要な役割の一つです。このことが、新しい文化や技術の創出につが

なるとともに、知の世紀である21世紀を豊かなものにしていくのです。
また、前号に引き続き、自主行動の5指針のうち、指針3をご紹介します。

国立大学の目指すべき方向——自主行動の指針——③
指針3 質の高い大学教育の提供と学位の信頼性の確立

質の高い大学教育は、基礎学力と知的好奇心のある学生に対して、研究能力が高く教育力にも優れた人間性豊かな教員が、適切なカリキュラム編成に基づき魅力的な授業を展開することによって可能になる。しかし、すべての条件が常に満たされるとは限らない。

野13項目を示し、あわせて、卒業認定試験の実施などを提案している。このような中であって、国立大学には、常に一定水準以上の教育成果を確実に保証できる大学セクターとして機能することが強く求められている。

大学全入時代の到来を控え、改めて大学は、自らの教育活動によって、教育の質の保証と学位の信頼性を確立することの必要性に迫られている。中央教育審議会大学分科会は、大学卒業までに学生が最低限身につけておかねばならない能力を「学士力」と定義し、知識・技能・態度・創造的思想力の4分

3-1 優れた研究活動を基礎とした教育内容を提供する
3-2 学ぶことの意味と価値を実感できる教育内容を提供する
3-3 国際的通用性のある教育システムを構築する
3-4 学位の質を保証する適切な評価システムを確立する

表紙の書

【伝】



東京藝術大学 学長
宮田 亮平 筆

「伝」という文字のものゝ形は、「傳」と表現します。

この形は、人と専を組み合わせており、裏の中にいれた物を「人」が背負う姿を表し、背負って運ぶ、他に運び伝えるの意味を持ちます。「つたえる、のちにつたえる、おくる、ひろめる」などの意味に用います。



社団法人 国立大学協会
The Japan Association of National Universities
<http://www.janu.jp>